

の主張は、しばしば目にする。これは語源論や伝統仮名遣いの問題となるので、術語の「読み」に仮名綴りを用いたら、はてしない議論となったに違いない。だからGHQの「助言」によってローマ字綴りを採用したことは、こういう面倒を避ける絶好の「天の声」だったと言うべきだろう。また当時優勢だった国語ローマ字化論者の主張に、巧みに便乗したとも言える。

なお用語集では常用漢字以外の文字の使用は、分野ごとに国語審議会の了解の下に認め

られているが、これだと分野にまたがる記述の場合には、使い分けの結果不統一になる。また、当初想定していなかったコンピュータによる文字列検索では、期待した結果を得られない。したがって一分野に認めた例外使用文字は、他分野にも自動的に及ぼすべきである。

(184-0013 小金井市前原町 5-8-7
5-8-7, Maehara-machi, Koganei-shi,
Tokyo 184-0013, JAPAN)

新 刊

□上野雄規：宮城県維管束植物目録。89 pp. 2008. 自費出版。

2001年に発行された「宮城県植物目録2000」に、発行以後に宮城県で発見された維管束植物を丹念に補充した目録である。これはTUSにある標本に基づいているので、その記録は再確認しやすいものとなっている。新たに追加された主なものにシダ植物ではオオバノハチジョウシダ、キノクニベニシダなど、種子植物にサクラバハシノキ、ホザキヤドリギ、ヒメタデ、チョウセンゴミシ、ヒキノカサなどがあり、合計167種が含まれている。

本書によれば、宮城県の維管束植物はシダ植物23科182種29雑種、種子植物159科2203種54雑種が記録されているという。学名、和名の他に「宮城県植物目録2000」と上野雄規(編)「北本州産高等植物チェックリスト」(1991)のページ、北限、南限などの分布記号、および「環境省レッドリスト改訂版2007」, 「宮城県版レッドリスト2001」の評価記号が対照できる。

購入希望者は著者 (tbs-ueno@feel.ocn.ne.jp) に申し込めば送料込みで1部1,300円とのこと。(大橋広好)

□Heywood V. H., Brummitt R. K., Culham C. and Seberg O.: **Flowering Plants Families of the World**. 568 pp. 2006. [Royal Botanic Garden, Kew. 2007. 424 pp.] £27.95. ISBN 13: 978-1-84246-165-5.

1978年に発行されたV. H. Heywood (ed.), *Flowering Plants of the World*の改訂版が2007年に出版された。“Families”という語が加えられていて表題が変わっているが改訂版である。発行以来2年近く過ぎてしまったが、今回の改訂版も紹介しておきたい。旧版は「大澤雅彦(監訳):ヘイウッド花の大百科事典」として2005年に邦訳されている。

本書は科のレベルで世界の被子植物全部についてコンパクトに概説していることが最大の特徴である。旧版の上梓以来被子植物の分類は特に分子系統解析の成果を受けて大幅に変化した。この改訂版では旧版の306科から507科に増加している。これらの科は単純に双子葉類と単子葉類とに分けられているだけで、双子葉単子葉それぞれに中で科名のアルファベット順に並べられている。高次ランクの分類はAPG IIを改訂したSoltis et al. (2005)に基づいて便宜的に目ランクを含めて作られた一覧表に並べられているだけとなっている。これは現在の被子植物に関する知識の状態が安定した分類体系を作り上げるには不十分であるためと考える理由による。多くの科で代表的な一つまたは複数の種の図があるが、この図は旧版の図を再配列している。

このため植物図のない科も多い。記述の内容は大いに改訂され、科内分類群の分類と近縁の科との関連性には分子系統解析の成果が取り入れられている。

本書は被子植物全体を科のレベルで形態を基本として簡潔にまとめており、記載と記述は充実している。文献はやや少ないが、最新のもの引用されている（それでも直ぐに古くなってしまふほど研究のスピードは速い）。科の扱いにも一部に APG II と異なる独自性があり、例えばシラネアオイ科を独立科と認めている。シラネアオイの図がないのは残念であるが、北海道で Brummitt と共にシラネアオイを調べたことが著者の理解を深めたのかもしれない。

本書は旧版と同じく、分類学、形態学、生態学など植物学分野の他に園芸学や林学などの農学分野、薬用植物学分野など、広い範囲の研究者に役立つことが多いだろう。古い分類体系が頭にあるためか旧版と併用すると便利である。改訂版はサイズがやや大きくなり（縦、横、厚さ 32×24×3.5 cm）、重くなった（1.6から2.4 kg）が、紙は白色、厚くて上質、製本は堅固である。

なお、評者は以前旧版の邦訳書を書評し（大橋：本誌 80: 363-364）、文中 hypogynous が「子房下生の」、epigynous が「子房上生の」と正しく和訳されているのに、意味が逆になっていると誤った指摘をしてしまった。この機会に同書の関係者の方々にお詫びします。

（大橋広好）

□太刀掛 優，中村慎吾（編）：改訂増補帰化植物便覧。A4。676 pp. 2007。¥6,300+税。比婆科学教育振興会。ISBN: No number.

1998年に刊行したものを改訂増補したものだが、最近の帰化植物の増加ぶりや認識の変化を反映して、サイズが B5 から A4 版となったうえ、頁数は306から676頁と大幅に増えた。前版にはなかった裸子植物とコケ植物が付け加えられている。収容種類数は約2,650種類、これは前版の約2倍にあたる。種類ごとにその出現文献が列記され、いかに情報が増加したかが痛感される。

帰化植物は従来の「新しい、珍しい、きれいな」という視点を卒業して、フロラの有力

な成員でしかも脚の速い攪乱要因、と考えねばなるまい。そうすると従来の「わが国への渡来は〇〇年、分布は A, b, c 県」という記述は考え直さねばならないだろう。たとえ過去に記録されていても、現在まだ存在しているかどうかはわからない。だから時刻（少なくとも年）を伴った地点記録を、繰り返し残す必要がある。そういう年代を伴った分布を重ね合わせることにより、帰化植物の動態が把握できるのではないだろうか？ この場合、これまでのような時刻のない記録を重ね合わせて分布点の多さを示すやり方は、なにかあぶなかしい感じがする。ここに示された多数の文献も、そういう視点からは役に立たないものが多いに違いない。

ついでに書くと、かつてセイタカアワダチソウが目立ってきたとき、その調査研究が盛んに行われたが、騒がれなくなった近頃ではなにも行われていないような気がする。なぜ目立たなくなったのか、本当に少なくなったのなら、その理由の調査研究というものも大事なのではなかろうか。もっともこういうことに調査費が出るとは思われぬが…。入手については比婆科学教育振興会：727-0013 広島県庄原市西本町 1-7-7 (Tel/Fax 0824-72-3234) へ。（金井弘夫）

□近田文弘：皇居吹上御苑，東御苑の四季 B4 版。189 pp. 2008。¥2,900。日本放送出版協会。ISBN: 978-4-14-081185-6.

1989年に「皇居の植物」が刊行された後、1996年から天皇皇后両陛下のご意向により、吹上御苑を中心とする皇居の生物相調査が、国立科学博物館を主体として行われた。この調査に参加し、その後も人々に皇居の自然を知ってもらうための自然観察会にたずさわっている著者が、一般の人の立ち入れない吹上御苑をはじめとして、皇居とその周辺の植物について、豊富な写真を用いて解説している。巻頭の折り込みは皇居のカラー俯瞰空中写真で、吹上御苑は遠景になっているとはいえ、普通では目にすることができないものだろう。その裏面は、垂直写真による主要地物の案内図である。

内容は地域を分けて、第一章：吹上御苑とその周辺、第二章：東御苑とその周辺地域、